予告

FUTURE EVENT 01

学校法人 名古屋自由学院 創立60周年記念事業

名古屋芸術大学オーケストラ 第32回定期演奏会ー第九ー

2014年12月4日［木］　17:30開場、18:45開演
会場｜日本特殊陶業市民会館 フォレストホール（名古屋市市民会館大ホール）
入場無料:全席自由（整理券あり）

指揮｜古谷誠一
独唱｜加地早苗（Sop.）、飯森加奈（Alt.）、加藤利幸（Ten.）、伊藤貴之（Bs.）
合唱｜名古屋芸術大学第九合唱団（合唱指導:山田正丈）

学校法人名古屋自由学院の創立60周年を記念して名古屋芸術大学のオーケストラ定期演奏会にてヴェートーヴェン交響曲第九番の合唱付き演奏が行われます。コンセプトは「オール名芸（自由学院）」。音楽学部声楽コース学生を中心として、学校法人名古屋自由学院在籍学生、理事長をはじめ全教職員、OB、OG、歴代関係教員から参加を求め結成された、60周年記念のスペシャル合唱団です。

チラシデザイン：デザイン学部3年 渡辺純江

ロビー展示

幼稚園児との共同作品
クリエ幼稚園などの園児と教職員や学生も参加した50mにわたる和紙を使ったフロッタージュによるコラージュ作品を展示

名古屋芸術大学コレクション
美術学部所蔵の教員と卒業生の作品、デザイン学部所蔵のヨーロッパ有名デザイナーによる椅子のコレクションを展示

演奏会の前後にぜひご覧下さい

2014 11 - 2015 03 EXHIBITION SCHEDULE

Open 12:15ー18:00（最終日は17:00まで）日曜・祝日休館　**入場無料** どなたでもご覧いただけます。
スケジュールは変更になる場合がありますので、ご確認ください。

11／ 7（金）→11／19（水）	2014年度企画展「SHOBU STYLE〜工房しょうぶの仕事〜」展
11／21（金）→11／26（水）	MCDデパートメント
11／28（金）→12／ 3（水）	Media Live/メディアデザインコース展
12／ 5（金）→12／10（水）	美術学部洋画2コース選抜展（仮称）
12／ 5（金）→12／10（水）	ラスト・プレパ 展
12／12（金）→12／17（水）	こどもの空間 絵本と椅子
12／12（金）→12／17（水）	2014年度後期留学生作品展
12／19（金）→12／24（水）	ガラス・陶芸コース2・3年生合同展覧会
1／ 9（金）→ 1／14（水）	日本画3年作品展
1／ 9（金）→ 1／14（水）	漫研展覧会（仮）
1／16（金）→ 1／21（水）	美術学部コース展
3／ 3（火）→ 3／ 8（日）	第42回名古屋芸術大学 卒業制作展

第19回名古屋芸術大学大学院修了制作展
2015年2月24日［火］ー3月1日［日］

会場｜名古屋市民ギャラリー矢田

第42回名古屋芸術大学 卒業制作展
2015年3月3日［火］ー8日（日）
会場｜愛知県美術館ギャラリー［愛知芸術文化センター8階］
名古屋市民ギャラリー矢田
名古屋芸術大学西キャンパス［アート&デザインセンター］

編集後記

特集の取材と展覧会の打合せの為にしょうぶ学園に滞在し、朝の体操から各工房の作業までを見学しました。施設長の福森さんとのお話は心に響く言葉がいっぱいで、まだ高揚感抜けきらずといった感じです。

一番印象に残ったのは「わからない」という言葉。何が彼らにとって幸福か分からない。だから彼らに寄り添いながら試してみる。その試行錯誤を繰り返して「SHOBU STYLE」が生まれた今もなお、「正解はわからない」と仰ったその言葉に、私は強さと潔さを感じました。つくるという行為も、同じなのかもしれません。

惣城友美（アート＆デザインセンター）

最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄犬山線（地下鉄鶴舞線乗り入れ）徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行一準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります
自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分

大学基準協会認定マーク
本学は2011年4月に、大学基準協会の大学基準に適合と認定され、認定評価を再取得しました。
認定期間は、2011年4月から2018年3月までです。
これにより、法令化されている「第三者による認定評価」にも合格したことになります。

名古屋芸術大学 Art & Design Center
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地　TEL［0568］24-0325　FAX［0568］24-2897

B!e Vol.41
発行日　2014年10月23日
編集　髙橋綾子（美術学部美術文化コース）／惣城友美（アート＆デザインセンター）
発行　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地　E-mail adc@nua.ac.jp　URL http://www.nua.ac.jp

2014　Printed in Japan © Art & Design Center, Nagoya University of Arts

デザイン／印刷　サンメッセ株式会社

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
B!e
NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS　ART & DESIGN CENTER　NEWS　2014.Vol.41

幸福の手

The hands of happiness

―しょうぶ学園の幸福論―

工房しょうぶの仕事に浸れる時間を過ごしてみたら

しょうぶ学園のことを知ったのは、まだ2年前のこと。私が作品を発表している名古屋のギャラリーで開かれた、nui projectの刺繍のシャツの展覧会でした。

私は大阪時代に、知的障害者支援施設で、自閉症やダウン症の人たちに絵を描いてもらっていたことがあり、ダウン症のHくんの絵がものすごく鮮やかだったり、その日の一番楽しい絵を描いている人の絵を瞬時に見極めて、真似た絵以上に上手く真似て嬉しそうにダンスするTさんの絵とか、魅力的な作品にお目にかかっていました。でも、しょうぶ学園の刺繍のシャツは、それらをはるかにしのぎ、しびれました。

その時、園長の福森伸さんって素敵で面白いと聞いて、3回ほどお目にかかれるチャンスを作ってもらったのに、仕事が入って会えなかった。8ヶ月後、熊本出張の3時間の空き時間に、台風迫る鹿児島まで高速を飛ばし、やっとしょうぶ学園を訪ねることができました。大雨の中、ユンボを使って木の植え替えをしている造園の人たちを横目に建物に入り、園長の所在を訪ねたら、ユンボの一団の中で号令をかけていた親方風の人が「ぼくです」。

建物内には、本格的できれいな布工房、木工房、紙漉工房などが整っていて、そこに知的障害をもっている人たちが、黙々と、淡々と、ニコニコと、思い思いの表情で、一心に刺繍をしたり、木の器を彫ったり、絵を描いたりしている。大阪時代の障害者支援施設では、やはり特別な雰囲気があって、2時間ほどの美術の時間を費やすと、気も使ってか結構疲れたのだけれど、しょうぶ学園の1時間半の滞在は、すごく居心地がよかった。

今年また訪問する機会があって、そうだとわかりました、やっぱりしょうぶ学園で時間を過ごすと、すごくリラックスできると。それは、ここで仕事？（制作、作業）をする皆さんは、時間をつぶしているのではない。おもしろいのかそうでないのかは本人が言わないからわからないけども、その人が今一番夢中になって時間を忘れてできることをしているから、いっしょにいる部外者の私も、そのリラックスした雰囲気に浸れているからなんだ。「これがビジュツの力なんだなあ」と、ぜひ学生たちにこれを体感してもらいたいと思いました。

ぜひ展覧会やワークショップに参加される皆さんも、工房しょうぶの時間に浸れるようにと願っています。

西村正幸　美術学部教授

幸福の手
The hands of happiness
—しょうぶ学園の幸福論—

作品には作り手の心が表れるというけれど、
ならばそれを生み出す「手」には、何が表れるのだろう。
しょうぶ学園を探索し、色んなこととしている「手」を追いかけました。
「しあわせ」の定義は多分ひとそれぞれ。
あなたがおもう、しあわせの手は、どんな手でしょうか。

福森 伸
しょうぶ学園統括施設長、2014年度名古屋芸術大学美術学部特別客員教授

1959年鹿児島県生まれ。1983年より「しょうぶ学園」勤務。木材工芸デザインを独学し、自らも制作者の1人として1985年「工房しょうぶ」を設立。木、布、土、和紙の工房があり、特に2000年頃より縫うことにこだわってプロデュースした「nui project」は国内外で高く評価されている。また、音のパフォーマンス「otto&orabu」、家具や食空間のコーディネートなど「衣食住＋コミュニケーション」をコンセプトに、工芸・芸術・音楽等、新しい「SHOBU STYLE」として、知的障がいをもつ人の様々な表現活動を通じて社会とのコミュニケート活動をプロデュースしている。

2014年度A&Dセンター企画展
「SHOBU STYLE ～工房しょうぶの仕事～」展
会期｜11月7日［金］—19日［水］
開館時間｜12:15—18:00　休館日｜11月8日［土］
会場｜名古屋芸術大学アート&デザインセンター

主催｜名古屋芸術大学アート&デザインセンター
企画｜名古屋芸術大学美術学部アートクリエイターコース
協力｜しょうぶ学園
後援｜Factory CAP

社会福祉法人 太陽会 しょうぶ学園　http://www.shobu.jp

レポート

REPORT 01

2014年度名古屋芸術大学美術学部 特別客員教授 川俣 正　特別講義

「通路—拡張」川俣 正
TADASHI KAWAMATA extending “WALKWAY”

2014年7月24日［木］
名古屋芸術大学西キャンパスB棟大講義室

「作品をつくるってことは一時的なものであって、同じ材料で全然違った組み立て方をして、それを一瞬だけ存在させて、また解体する。そこに僕はとても興味があった。ものをつくる“こと”だけで成立しないかなと」

「お祭りの山車って、そのものが何百年もある訳じゃなくて、一つのルールに則って同じものが作られていく。ものが残るんではなく、もののスタイル、型が何世代も続く。それが一つのものの残り方じゃないかって。それってすごく日本的な考え方かもしれないし、そういう発想でものをつくっていければおもしろいかなと思っています」

「開くっていう発想は無い。内輪で受けてなんで悪いのかなって。それでも入れる人は入ってきたらいい。それを開いて尚且つ誰もが関われる一般的なサービスとする気は全然ない。そうやっていかないと作るものが強くなっていかない」　（川俣氏講義より）

左から川俣氏、ゲストスピーカーの山口氏、菊池氏、鈴木氏。

川俣正は自らの＜WORK＞をアートレスあるいはワーク・イン・プログレスなど、硬質にして鮮烈な言葉で語ってきたが、「通路」もまた、その仕事を特徴づける重要なタームの一つだ。何処からか何処かへと至るそのプロセス自体であり、また、そこに「マイノリティ」をも含む多くの人が合流し、その所々に滞留し、またそこから炭鉱やホームレスなど社会的問題にも即した固有の道を多岐にわたって開いていく、そのような通路が、特に近年の川俣の仕事のメタファーとなる。

2008年東京都現代美術館で開催された「川俣正 通路」展は、このこと自体を示す稀有な個展であったが、その後東京で展開した「川俣正・東京インプログレス」や横浜の「Expand BankART」は、この「通路」としての川俣を東京の川に沿って展開し、横浜の元倉庫に凝縮＝拡張して見せたともいえる。今回の特別講義は、このような「通路」を川俣自身が語り、川俣のもとで/とともに推し進めてきたゲストスピーカーの3人がそれぞれの地点から語り、そして4者が共に語り合うことで、言葉の空間の中に構築してみようとする場となった。

ゲストスピーカー：　菊池拓児（クリエイター、コールマイン研究室室長）
鈴木雄介（建築家）
山口祥平（首都大学東京助教）

｜特別演習｜「KAWAMATA SEMINAR—To be Artist 芸大でひらく」

2014年7月25日［金］
名古屋芸術大学西キャンパスB棟視聴覚室

次の日に行われた大学院生を対象とした特別演習では、山口氏を交えて東京芸術大学で行われたプロジェクトや、ボザール（フランス国立高等美術学校）で現在進行中の病院を使ったプロジェクトの話から、モノをつくることからどうアートプロジェクトになっていくのか、また作品を社会的に形にしていく事の重要性などが話された。学生との質疑応答も交え、「大学でどう教育するか」ではなく、どう個人が表現活動を行う上で自身の試練を乗り越えて行くか、参加者それぞれに刺激を与えたセミナーとなった。

ART WORDS FROM THE ART WORLD

『町のけんきゅう』（福音館書店刊）は街の観察の入門書。

考現学採集者
岡本 信也
Shinya OKAMOTO

芸術一話 第17話 日常事物の観察レッスン

情報産業社会のなか、文字・映像・音声、電子の大洪水から逃れるのはむつかしい。時にはそこから離れて、いま、住んでいる身近な町や、ありふれた日常事物を観察してみるのも大切である。

この国の近代美術や文学は、写生 —— つまりスケッチからはじまったとも言える。科学的視点で、目の前にある事物を描いたり、書いてみること。これをくり返しレッスンして現実の世界（社会）を知り、自己（内部）を発見してきたと思う。

けれども、いまの情報産業はその作業（レッスン）を先取りし、洪水のように多量な情報を流し続け、美術や文学を土砂崩れさせ、廃物化、浪費させてしまう。私たちは、自（みず）から考え、発見する喜びを失なって、どこかで見てきたような、いつか聞いたような情報ばかりが横行している。

観察の作業はフィールド・カードによる。1件の事物に対して1枚のカードをつくり、図や文字で記録する。これを日々、続けて数十枚、数百枚に達したら、ふり返える。ちょうど日記を読むようにして…。観察した事物に愛着を抱くこともあるだろうし、社会の問題の発見に気づくこともある。情報産業の安易なうけ売りではなくて、自分の手足と耳目で考えた、たしかな事柄だから。